

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32612

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）

研究期間：2019～2023

課題番号：19KK0008

研究課題名（和文）在米日本漢籍の蔵書学 今関天彭蒐集書を事例として

研究課題名（英文）An Investigation for the Imazeki collection located in American Libraries

研究代表者

住吉 朋彦（SUMIYOSHI, TOMOHIKO）

慶應義塾大学・斯道文庫（三田）・教授

研究者番号：80327668

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 14,200,000円

研究成果の概要（和文）：今回の研究により、今関旧蔵本の書誌と画像を「今関コレクションデータベース」にまとめ、研究者に基礎情報を提示した。また原本の書誌調査を進め、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館（以下UCB-EAL）に5回渡航し、199部1857冊の調査と撮影を行った。これにより今関旧蔵本漢籍四部の調査を終えた。またUCBからUCLAに譲渡された書目を析出、UCLA-EALにおいてその調査撮影を完了した。その際、UC文書を調査し、譲渡の実態を明らかにした。調査研究の結果を踏まえ、今関旧蔵本の特徴をまとめ、2023年にUCBで国際研究集会を、2024年に北京大学で国際シンポジウムを開き討論と普及を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今関天彭蒐集漢籍の背後には、清朝文化に向けられた強い探究心があり、それは民国時代における現状理解の工作であるのと共に、独自の発達を遂げた学術を、東洋思想発展の萌芽として重視する志向であった。呉梅村の文学に向けられた哀悼や、詞曲小説の愛好は、それが感情のレベルで醸成された確信であり、馬叙倫との交流や、その学術観紹介の努力を見ると、近代を変革する原動力を現に求めていたことと知られる。これは、文献考証の技術を学ぶ純粹培養の学問ではなく、国境を越えた人的交流の中で蓄えられた思想であって、彼の蔵書は、漢文化に基づく東洋の可能性を示そうとする知的遺産であったことを、今回の研究は明らかにした。

研究成果の概要（英文）：As a result of this research project, we produced information by compiling a database named "Imazeki Collection Database" for researchers. Then 5 times overseas tours to the University of California, Berkeley, East Asian Library, or UCB-EAL were conducted to examine the originals and take pictures of them. The number of items is 199 titles in 1857 volumes. We had finished examining originals to the last of the Quartile Classification. On the other hand, some titles were recognized that they had already given to UCLA-EAL, thus we also visited the library and finished checking all of them. At the same time, we also examined the UC documents and confirmed that some Imazeki items were given to UCLA in 1955. Based on these results, an International conference was held in UCB in 2023 and an international symposium at Peking University in 2024 gathered overseas scholars. Finally, we succeeded in getting them informed about the significance of the Imazeki collection.

研究分野：東洋書誌学

キーワード：日本漢籍 蔵書学 今関天彭 書誌学 文献学 考証学 詞曲 小説

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 第二次世界大戦後の日本社会の転換は、学術研究にも大きな変化を与え、戦前に蒐集された学術資料の保全利用の方面にも影響を及ぼした。アメリカ合衆国による旧日本軍関係図書館の解体と資料接收は、その大きな事例であったが、民間レベルにおける資料の海外流出にも、また甚大なものがあり、米国大学による書籍等の資料蒐集が盛んに行われた。特に1949年の中華人民共和国の成立は米中関係の断絶につながり、中国研究を含む東アジア資料蒐集の主な舞台は、日本となっていた。この時期、米国の東アジア研究も、戦時下の敵情考察から衣替えし、言語文化の総体を深く認識し交流しようとする、東アジア言語文化学科の新設と、研究資料の蒐集が急務とされたのである。そうした事情の中で行われたのが、三井合名会社(戦後の清算会社)からカリフォルニア大学バークレー校(以下UCB)への売却という形で実現された、1950年の三井文庫資料の移転である。この文庫にはいくつか、三井財閥に支援を受けた個人蒐集のコレクションが含まれていた。中国文化研究者の今関天彭氏が蒐集した今関旧蔵本も、その一である。

(2) 今関天彭氏は、千葉県東金出身の漢学者で、明治期には東京国民新聞社で書籍編集に従事する一方、文壇で清朝外交官等と交流し、詩文製作の修養を積んでいたが、この間に大陸渡航の志を抱き、大正5年(1916)から京城に渡り朝鮮総督府嘱託として勤務、1918年には中華民国北京市に移り、大陸で電信事業に着手した三井合名会社の支援で、今関研究室を開設した。現地では清以来の国情と現地情勢に精通し、邦人向けにパンフレットの出版や講演を実施、情報提供と啓蒙活動を行った。今関氏の中国研究は、伝統的文化観と近代化の双方を踏まえた奥深いものであり、その素養を駆使して華人との交渉を行ったため、現地では日中双方の要人、名人の間に信用を築き、駐華領事から大使、外相へと進んだ重光葵や、親日政権とされる汪兆銘南京政府の顧問となるなど、政治の方面にも関わっていった。しかし今関氏は、対中強硬策を主張する軍部と合わず、体調と治安の悪化にも鑑み、昭和5年(1930)の満州事変を契機として、研究室を閉鎖し東京に戻った。この間、12年の北京での蒐集資料は、研究室の閉鎖後、昭和7年(1932)までに三井合名会社に引き取られ、今関旧蔵本と呼ばれた。三井ではこれを三井文庫の管轄とし、昭和14年(1939)には『今関旧蔵本目録』(以下「旧目録」)を編集、内部資料として使用した。この目録と今関氏の証言によれば、今関氏から三井側への書籍移譲は、第1次の主な引継ぎと補遺とに分かれ、都合3次に涉っている。

(3) さて、三井文庫資料のカリフォルニア大学(以下UC)への移転は、アメリカ西海岸の東アジア研究に大きな基礎を与えたが、米国図書館界の整理方針は、漢字圏の蔵書文化とは、少しく異なるものだった。その大きな項目の一は、重複本に対する考え方である。殊に公共図書館を急速に整備展開してきた米国では、資源の均等な配分に対する意識が強く働き、各図書館に重複本の蔵儲を許さなかった。無論、前近代の稀少本や文化財について、その原則を適用することはなかったが、三井文庫中の今関旧蔵本について言えば、今関氏が近代につながる清朝の社会文化に強い関心を抱いたことと、北京における書籍蒐集の実情から、清末民国期の綫装の木版印刷本が大半を占めていたが、年代による判定から、その多くは一般図書の扱いを受けることになった。このため、今関旧蔵本の一部は貴重書に判定され別置、その他は分類に従い一般書架に配置(のちにキャンパス外の保存書庫に移転)された他、UCB東アジア図書館(以下EAL)の先行蔵書と同版と見なされた図書は、既蔵書の不足部分を外して遺す等、小異を調整した後、1955年のUCLA東アジア図書館(同)への委譲を皮切りに、UC内外の大学図書館に広く提供され、遠く中西部のアイオワ大学やミシガン大学にまで散開してしまった。

(4) 本研究の代表者は、科学研究費による2008-2011年度の基盤研究(B)「日本国外に現存する日本漢籍の総合的研究」(代表佐藤道生、課題番号20320040)に参加する中で、三井文庫本を含むUCB-EAL所蔵日本旧蔵漢籍の調査と編目を行い、この際に今関氏旧蔵の貴重書に触れた。その来源を確かめるうち、その大略の規模と図書館における現状を知ったが、当該計画の中で全面的な調査を行うには至らなかった。その後、三井文庫現蔵の『旧目録』の存在に気付き、1418部に及ぶ総数ほか、調査実施の見通しを得たため、2017年度に所属先「福澤基金」に拠りUCB東アジア研究所(以下IEAS)に留学し、今関旧蔵本の悉皆調査を開始した。しかしこの段階で、『旧目録』と現状を対照、また米国におけるHathi Trust Digital Libraryの文献画像の公開が重なり、上記の今関旧蔵本散開の事実が知られるに至った。そこで留学期間内に、UCLA、アイオワ大学を始め、米国内7機関に出張調査を行い、そうした観測の正しさを実証することができたが、一方、概算で全体の2割程度がUCBの外に散開していることが判明、その一部を含め、第1025部までの調査を行ったところで、時間的制約から研究を中断した。

(5) 悉皆調査は途半ばとなったが、この間に、今関旧蔵本の蔵書としての価値が、次第に見通されるようになった。その特質の第一は、清朝および中国古典文化を知るための、総合的かつ実践的な資料群であり、個人の関心や嗜好を超え、網羅的かつ一定の視点に支えられた蔵書であって、近代の漢学者と近代政治のベクトルが合わさり実現した「今関研究室」蔵書として、歴史的な価値を帯びているという点である。当初、漢籍書誌学の実務的関心から始められた調査であったが、蔵書研究という、その高度な実践に値する素材であり、個人の研究活動から幅を広げて研究成果を充実させるためにも、様々の角度から探求する必要がある、何よりもその国際的な流伝の経緯と性格から、国際的共同研究の枠組みを築いて取り扱うことが妥当だと思量された。

## 2. 研究の目的

1 に述べた背景に鑑み、今関旧蔵本を対象とする「蔵書学」の展開を研究の目的とした。方法としての特質は、次項3に述べるとして、ここではその実際の課題設定について触れたい。

(1) 目的の第一は、今関旧蔵本の書誌学的調査を完結し、その実像を提示することであった。具体的には、研究代表者個人が実施してきた書誌調査の続行、第1026部以降の著録である。これは内容上、漢籍の四部分類で編成された『旧目録』の、集部別集類清人の部の途中からに該当する。今関旧蔵本としては、この後に、別集の残りりと総集、詩話および詞曲小説類と叢書が取り残されていたことになる。これらの書誌著録が第一の目的となった。

(2) 次なる目的は、蔵書の全体から析出した性格の発見と考察である。詳しく言えば、近代的蒐集に係る蔵書のもつ性格が書誌調査から垣間見えるため、そうした情報を集積して、蔵書の性格を見出すことである。そして、そうした性格が実現するに至った今関氏の指針、今関研究室の活動実績との整合性、もしくは乖離について考え、他の近代的蒐集との関わり、また今関氏自身が、日本帰還前後を通じ、個人的に蒐集保持した遺品との関わりを、比較研究し考察することである。

(3) また最終の目的としては、析出された蔵書の性格を、東アジア近代という場に還元し、その意義を明らかにして、「蔵書学」の研究事例を完成することである。その際に、中国文献学に導かれて成立した日本の漢籍書誌学が、客観性を重視して積み上げてきた文献把握の方法を昇華し、文化史研究の一分野として関係諸地域の学術研究に反映され、若手を含む広い年代の研究者に認知され、活用されるよう、実例をもって明示することを狙いとした。

## 3. 研究の方法

日本で行われてきた書誌学の方法を展開し、その応用研究としての蔵書研究を洗練することにより、「蔵書学」という研究分野を開拓した。

(1) 研究対象の実態を把握し、書誌学の応用研究を展開する上で、書誌の著録をその初歩と定めた。基本として紙に手書きする書誌を用いたが、電子化画像の取得と、データ入力による目録情報の電子化を併用した。近代以前の書籍の特徴を、相互に比較可能な形で均質かつ効率的に抄録する際、現在の情報環境においては、依然として手書きの一次情報を用いることが妥当と評価し、採用した。これは今回研究における過渡的な判断であって、手書きの書誌と電子化データの併用は、効率においては重複の短所なしとしないが、確実性の担保という意味では長所もあった。書誌の内容については、要件を統一して調査担当者には準拠を求め、その細部と応用補足においては各員の工夫に任せた。

調査の担当は、研究分担者がそれを担ったことはもちろんであるが、研究期間の前半、2020年度から22年度の前半にかけては、コロナ禍の時期に当たり、海外に赴いての調査研究活動が出来なくなった。そこで調査の進捗に大きな遅れを生じたが、これを補う必要から、期間後半の調査可能時期には、研究組織外の若手研究者に協力を仰ぎ、調査態勢を拡大した。その際、書誌著録の要件を、大略事前に共有していたことが鍵となり、この計画は有効に働いた。

今回の研究目的に照らすと、書誌著録の中でも、今関氏や旧蔵者が書籍に附加した情報には、核心的な価値がある。例えば書籍の寄贈者の識語や、今関氏の蔵書印記、整理閲読の痕跡等である。これらは、まず今関氏蔵書印記の確定と、書帙や題簽、書入れの文字の弁別が、対象確定の要件となった。また識語類についても、個々の蔵本をつなぐ蒐集の糸として、極めて重視した。

(2) さて、研究代表者は研究開始以前にも著録したデータを蓄積していたが、本研究では、新旧のデータを合せて初めて、蔵書研究のステップに進めることになり、旧データの共有も極めて重要となった。そこで、今回はまず、『旧目録』を電子化し、それを基礎とする編集途上の「新目録」をクラウドに配置 (<https://keio.box.com/s/yq7xu8zyk0ovcos12rqcapsfuc7latwi>)、研究開始前後の進捗を共有した。さらに、書誌を画像として電子化、目録をブリッジとして写真画像と結び付け、全体の約3分の2をカバーする「今関コレクションデータベース」を作成、データサーバに設置し ([https://db3.sido.keio.ac.jp/imazeki\\_db/](https://db3.sido.keio.ac.jp/imazeki_db/)) 研究組織内に公開した。この措置は、2020~21年度のコロナ禍時期に、研究を進める工夫として採用したが、インターネット経由でどこからも閲覧できるため、国際共同の補助となった他、研究の後半には調査の現場でも活用された。

(3) 書誌調査により集積された蔵書研究の材料は、調査の外側の視点からも読み直されなければならない。その際に梃子として用いたのは、今関氏著作との照合という方法である。今関氏の著作は、公刊された資料も少なくないが、特に重要なものは、正に蒐集を進めつつあった北京時代の作品であり、30種に及ぶ今関研究室発行のパンフレットが、最重要の文献である。これらは今日、既に稀覯に属するが、幸い研究メンバー所属の慶應義塾大学附属研究所斯道文庫は、今関氏個人蔵書と、その出版書をも「今関文庫」として収蔵することから、その参照が可能であった。

(4) 蔵書研究としての結論を、個別の事例としてのみでなく、近代学術文化の一斑として見るためには、他の蔵書との比較、比較蔵書研究の観点が必要となる。近代日本の漢学者として、中国に赴き書籍の蒐集に努めた事例としては、古城坦堂の蔵書が挙げられる。坦堂蔵書は、同郷の古城氏を支援した細川家永青文庫の所蔵であるが、やはり慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に寄託されており、便宜がある。そこで、斯道文庫に留学経験があり、坦堂文庫調査整理に携わった経験のある、海外共同研究者の鄭幸氏を加えたメンバーで、古城氏が蔵書の蒐集、解読と日中交際の様子を記録した『雑録』を、共同で校読した。坦堂と天彭には、年代や立場の相違があるが、同じ網羅的な漢籍の蒐集といっても、蔵書の性格にその違いが反映しており、蔵書の比較研究を経たのちに「蔵書学」の一事例が成立した。

#### 4. 研究成果

(1) 研究開始の段階で準備した「新目録」データと「今関コレクションデータベース」の作成公開については、3の研究方法の中で触れた。

(2) 「新目録」に結果を反映したところの書誌調査は、UCB-EAL を第一の調査先とし、まず2019年度後半に当たる2020年1月4~13日に代表者1名で渡航し、24部118冊を調査撮影した。その後、同3月8~15日に4名による調査を設定したが、年初以来のコロナ禍が日米でも拡大し、中止を余儀なくされた。また2020~2021年度の間は、調査先EALも閉館し、一切の調査が行えなくなった。この間も、現地との連絡を続けていたが、当初計画最終年度の2022年になり、開館に向かう形が伝えられ、日米間の渡航制限も段階的に緩和される運びとなった。そこで調査再開を準備し、2022年7月31~8月8日に、まず試験的に代表者1名で渡航、22部123冊を調査撮影した上、安全面を考えても十分に実施可能と判断、すぐに研究分担者と、外部若手研究者2名を交えた4名の調査チームを編成し、9月11~19日にUCBを再訪、30部394冊の調査撮影を行った。また年度末にも、前記チームに組織内外各1名の調査者を加えた6名の拡大チームを編成、2023年3月19~27日に3度目の調査撮影を実施した。この際には52部352冊を取り扱った。最終年度途中から研究環境が改善したため、研究期間の延長を申し出て認められ、2023年度にも調査を継続、2023年9月5~23日に、代表者1名で渡航し、55部739冊を調査撮影した。さらに、研究期間内の調査により、当該の今関旧蔵本がUCBからUCLAに移転している可能性の強い書目が多数発見されたため、同24~30日間にUCLA-EALで、その追加調査を実施、16部131冊を著録して、総計199部1857冊の調査撮影を実現した。これらは内容上、『旧目録』本編の四部分類全てを調査完了した形である。但し叢書の部と追加補遺部の調査は、時間的制約からこれを断念せざるを得なかった。

(3) 本研究で採用した書誌著録法は、基礎技術として海外でも紹介、告示した。具体的には、2022年9月15日、EALに海外共同研究者のジョナサンズウィッカー氏と共催し、東アジア言語文化学科(以下EALC)の大学院生等を招いて、代表者がレクチュア「和刻本漢籍の再定義」を行った後、三井文庫の図書原本を実見した上で、日本側研究者がそれぞれ、著録、編目上の要件を紹介するワークショップを開き、学术交流を行った。

(4) さらに、調査と平行して行って来た蔵書研究の成果報告と、海外研究者からのフィードバックを目的に、2022年3月時の調査に合わせ、米国から1名、日本から2名の外部研究者をパークレーに招き、内部からは、海外共同研究者のブライアンスタイニンガー氏他4名が参加して、3月24日に国際研究集会 The Transformation of Sino-Japanese Culture under Modernity: Reconstructing the Imazeki Tenpo (1882-1970) Sinology Collection at the Berkeley library をUCB-EALC, EAL, CJSと共催、英語による研究発表5件、日本語、中国語各1件を通じ、日本漢学史上における今関蔵書と、その研究の意義を確認した。具体的な内容は、下記の通りである。

#### Introduction

On the Fate of Imazeki Tenpō's Collection of Chinese Editions in American Libraries (Eng.)  
アメリカ収蔵の今関天彭旧蔵漢籍について(英語) Sumiyoshi Tomohiko, Keio University  
住吉 朋彦, 慶應義塾大学

#### Session

Prayer Collections 願文集 between Early and Modern Japan (Eng.)  
願文集の伝承—古代と近代の間(英語) Brian Steininger, Princeton University  
ブライアン スタイニンガー, プリンストン大学

A Consideration of Imazeki Tenpō's Study on Literature of the Five Mountains (Jpn., Zoom)  
今関天彭の五山文学研究(日本語,ズーム参加) Horikawa Takashi, Keio University  
堀川 貴司, 慶應義塾大学

"Early Modern" Literati's Perspectives on Ordering the World (Eng.)  
《近世》文人の経世観(英語) Yamamoto Yoshitaka, National Institute of Japanese Literature  
山本嘉孝, 国文学研究資料館

#### Discussion

Organizer: Brian Steininger  
司会: ブライアン スタイニンガー  
Discussant: Horikawa Takashi, Yamamoto Yoshitaka, Sumiyoshi Tomohiko  
討論者: 堀川 貴司, 山本 嘉孝, 住吉朋彦

#### Session

Evaluation and Historical Description of Early Modern Japan's Sinitic Poetry in Later Periods: Reconsidering the Significance and Background of Imazeki Tenpō's Study  
近世日本漢詩はいかに評価され、文学史的に定位されたか—今関天彭の著作の意義とその背景  
Goyama Rintaro, Keio University  
合山 林太郎, 慶應義塾大学

A Study on Imazeki Tenpō and His Kindai shina no gakugei (The Arts of Modern China)  
(Chin.) 今関天彭與《近代支那之学藝》(中文) Chen Jie, University of Tokyo  
陳 捷, 東京大学

Imazeki Tenpō's Conception of Eastern Culture: The Rhetoric of Tōhō Bunka in Gayū (Eng.)

今関天彭における東方文化の概念—『雅友』を例に Matthew Fraleigh, Brandeis University  
(英語) マシュー フレーリ, ブランダイス大学

Discussion

Organizer: Matthew Fraleigh

司会: マシュー フレーリ

Discussant: Goyama Rintaro, Chen Jie, Jonathan Zwicker

討論者: 合山 林太郎, 陳 捷, ジョナサン ズウィッカー

Jonathan Zwicker, University of California, Berkeley

ジョナサン ズウィッカー, カリフォルニア大学バークレー校

Review

このイベントでは UCB の学生だけでなく、UCB の教員やサンフランシスコ湾岸地域の関係研究者が聴衆として参加し、有益な見解が示されただけでなく、米中間の別の共同研究計画とも接点を生じて交流が企画され、日米の若手研究者が交流を図るなどの効用があった。

(5) 延長された最終年度の 2023 年 9 月の出張では、UCB での調査期間中に、上記(4)の住吉報告を受け、EAL 学芸員のデボラルドルフ氏より、UC の大学文書中に三井文庫重複本の処置に関する記述があるとの情報を返して頂いた。これにより同校バンククロフト図書館において臨時に UC 文書の調査を行い、三井文庫本中の重複本を、1955 年に UCLA-EAL に無償で譲渡した経緯の、記録されていることを確認した。この間のやりとりには、具体的な譲渡の日時や手順、図書館や主幹ライブラリアンの方針等が示されており、無償であったことの他は、実際から想像していた内容に、ほぼ間違いのないことが証明された。

この発見については、次の調査先であった UCLA-EAL でもすぐ共有し、受取り側の関連資料の検索も行ったが、こちらは継続の課題となった。調査より帰国後の 11 月 18 日、この間に知られた状況を整理し、折りしも研究メンバーが招待を受けた早稲田 UCLA 柳井イニシアチブによるシンポジウム Cross-Border Book Exchange and Natural History Writing: Library Collections, Classical Studies, and Digital History において、研究代表者が「UCLA 東アジア図書館所蔵の今関天彭旧蔵漢籍について 旧蔵書研究の視点から」と題する報告を行い、併せて UCLA 流出分にも、今関氏の清朝文学への傾倒と、今関旧蔵本の蒐集意図を知らしめる事例のあることを報告した。

さらに同じく 12 月 13 日には中華民国(台湾)国立中央研究院歴史語言研究所の明清研究国際学術研究会に招待を受け、比較蔵書研究に関する成果報告として「近代日本漢学者の中国体験と蒐書について 古城坦堂と今関天彭を例として」との題目で成果報告を行い、台湾文学研究という脈絡から、大日本帝国影響下の東アジアにおける書籍蒐集の意味を討議した。

最後に、2023 年の半ば頃から、中華人民共和国への渡航が現実的なものとなってきたため、当初から計画していた北京市への渡航と現地踏査、在北京研究者との意見交換を計画し、2024 年 3 月 3~13 日の日程で、研究分担者 2 名と共に北京大学に滞在し、関連の書籍調査と、3 月 11 日には北京大学中国文学系と共催のシンポジウムを実施した。その構成は下記の通りである。

#### 今関天彭と日本近代漢学研究

主講人 住吉朋彦 (日本慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授)

陳 捷 (日本東京大学人文社会系研究科教授)

主持人 劉玉才 (北京大学中国文学系教授)

与談人 張明杰 (浙江工商大学東亞研究院特聘教授)

矢島明希子 (日本慶應義塾大学附属研究所斯道文庫専任講師)

このシンポジウムでは、民国時代の北京における書籍流通と、在留日本人による書籍蒐集、また在日中国人による日本での書籍蒐集との比較研究に焦点が当てられた。北京大学の教員、大学院生だけではなく、北京在住の関連分野の研究者と討議を行うことができ、発展的な研究課題として受け容れられた。さらに翌 12 日には、参加メンバーによって、今関研究室の置かれた北平東裱褙胡同十七號(現北京市東林区北京古観像台附近)の地や、三井財閥が大陸における電信事業のために作り、その成功を期して今関研究室を支援した双橋無線電臺(現北京市朝陽区双橋中路)、旧隆福寺古書肆街跡(現北京市東城区隆福寺街)を踏査し、各員これまでの研究に新たな実感を込めて、研究を結束した。

(6) 以上の研究成果を総合すると、書籍調査の方面では、『旧目録』本編四部全ての一次調査終了という達成を遂げることができた一方、補遺の部は未調査に終わったこと、また UCB から流出したらしい書目について、米国内での追跡調査が十分に達成できなかったことは、今後課題を残した。

しかし、蔵書研究の展開という意味では、研究メンバーがそれぞれの関心に従い、今関天彭をめぐる近代日本漢学の潮流を、新しい角度から描き出すことに成功した。そこで、研究期間の終了後も、『旧目録』補遺部 38 部 251 冊の著録と叢書部の概観を行ったのち、「新目録」と蔵書紀要、善本解題と、個々の論説を収録した「蔵書学」研究書籍の出版を準備し、「新目録」に基づき電子化調査データの全てを増補した「新今関コレクションデータベース」の公開を行いたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 住吉朋彦	4. 巻 花鳥社
2. 論文標題 古城坦堂蔵書の旧蔵者について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 古典文学研究の対象と方法	6. 最初と最後の頁 725-746
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 住吉朋彦	4. 巻 58
2. 論文標題 『元治増補御書籍目録』翻印と解題（下）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 37-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 住吉朋彦	4. 巻 57
2. 論文標題 『元治増補御書籍目録』翻印と解題（中）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 33-279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 陳捷	4. 巻 184
2. 論文標題 服部宇之吉家書（附日記）解題・翻刻	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東洋文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳捷	4. 巻 八木書店出版部
2. 論文標題 江戸中後期好古家による古典籍装訂・装具研究について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本漢籍受容史 日本文化の基層	6. 最初と最後の頁 415-445
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢島明希子	4. 巻 57
2. 論文標題 稲生若水撰『詩経小識』の伝本調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 363-404
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 住吉朋彦	4. 巻 56
2. 論文標題 『元治増補御書籍目録』の翻印と解題(上)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 133-349
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堀川貴司	4. 巻 101-3
2. 論文標題 五山文学における水仙のイメージ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 91-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀川貴司	4. 巻 56
2. 論文標題 紅葉山文庫旧蔵『續新編分類諸家詩集』について 『新選集』『新編集』研究その七	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 33-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 矢島明希子	4. 巻 56
2. 論文標題 稲生若水撰『詩経小識』の伝本調査 (一)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 485-529
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 陳捷, 服部繁子	4. 巻 27
2. 論文標題 『(清国家庭及学堂用) 家政学』における西洋料理とそのエチケットについて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 環日本海研究年報	6. 最初と最後の頁 64-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 陳捷	4. 巻 249
2. 論文標題 乾隆・嘉慶期における叢書の編纂と出版についての考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 漢学とは何か 漢唐および清中後期の学術世界 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 148-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 陳捷	4. 巻 120
2. 論文標題 An Examination of the Compilation and Publication of Collectanea during the Ch'ien-lung and Chia-Ch'ing Reigns	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 What Is Han Scholarship?: With a Focus on the Han-Tang and Mid-to Late Ch'ing Periods, ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture	6. 最初と最後の頁 51-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢島明希子	4. 巻 55
2. 論文標題 日本における『毛詩草木鳥獸虫魚疏』の受容 国書中の引用に関する調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 209-241
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 矢島明希子	4. 巻 54
2. 論文標題 松崎謙堂校刊影宋本『爾雅』について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 83-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堀川貴司	4. 巻 135
2. 論文標題 文人の書簡 交遊・教育・議論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 斯文	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 12件 / うち国際学会 17件）

1. 発表者名 住吉朋彦
2. 発表標題 今関天彭の漢籍蒐集と文献学
3. 学会等名 北京大学中文系海外名家講座系列「今関天彭与日本近代漢学研究」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 陳捷
2. 発表標題 關於今関天彭的『近代支那の学芸』
3. 学会等名 北京大学中文系海外名家講座系列「今関天彭与日本近代漢学研究」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 住吉朋彦
2. 発表標題 近代日本漢学者の中国体験と蒐書について 古城坦堂と今関天彭を例として
3. 学会等名 2023中央研究院明清研究国際學術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 堀川貴司
2. 発表標題 五山文学における水仙のイメージ
3. 学会等名 柳井イニシアティブOPENTALK（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 矢島明希子
2. 発表標題 『詩經小識』の諸伝本について 写本に見る知的ネットワーク
3. 学会等名 柳井イニシアチブ国際シンポジウム「越境する書物交流と博物書写 蔵書・経学・デジタル歴史学」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 住吉朋彦
2. 発表標題 UCLA東アジア図書館所蔵の今関天彭旧蔵漢籍について 旧蔵書研究の視点から
3. 学会等名 柳井イニシアチブ国際シンポジウム「越境する書物交流と博物書写 蔵書・経学・デジタル歴史学」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 住吉朋彦
2. 発表標題 On the Fate of Imazeki Tenpo's Collection of Chinese Editions in American Libraries
3. 学会等名 International Conference: The Transformation of Sino-Japanese Culture under Modernity; Reconstructing the Imazeki Tenpo (1882-1970) Sinology Collection at the Berkeley Library (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 住吉朋彦
2. 発表標題 今関天彭の漢籍蒐集と文献学
3. 学会等名 白川静記念東洋文字文化研究所プロジェクト研究「日中韓漢籍研究」研究会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 住吉朋彦
2. 発表標題 日本漢学家古城坦堂蔵書の旧蔵者について
3. 学会等名 第二屆「古籍文献収蔵・研究及整理出版」国際學術論壇（オンライン）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀川貴司
2. 発表標題 今関天彭の五山文学研究
3. 学会等名 International Conference: The Transformation of Sino-Japanese Culture under Modernity; Reconstructing the Imazeki Tenpo (1882-1970) Sinology Collection at the Berkeley Library (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 陳捷
2. 発表標題 今関天彭與《近代支那之学藝》
3. 学会等名 International Conference: The Transformation of Sino-Japanese Culture under Modernity; Reconstructing the Imazeki Tenpo (1882-1970) Sinology Collection at the Berkeley Library (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 陳捷
2. 発表標題 「日本医学古籍晚清流入中国的商業渠道 以王寅東壁山房為例
3. 学会等名 首都医科大学「中国古代医学文献的现代阐释」国際シンポジウム（オンライン）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 住吉朋彦
2. 発表標題 古城坦堂旧蔵の朝鮮渡り唐本について
3. 学会等名 2021年度朝鮮渡り唐本研究の研究報告会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 陳捷
2. 発表標題 『（清国家庭及学堂用）家政学』中の西洋飲食及西餐礼儀
3. 学会等名 「近代の“西餐”、“洋飯書”及び“大餐館”」国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢島明希子
2. 発表標題 斯道文庫所蔵影宋本『爾雅』について
3. 学会等名 斯道文庫開設60年記念フォーラム 書誌学のこれまでとこれから
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀川貴司
2. 発表標題 五山文学
3. 学会等名 釜山大学校漢文学科BK21PLUS東アジア伝統知識と翻訳事業団第14回海外学者招聘セミナー（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 姜生、三浦國雄、田訪、矢島明希子共編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 708
3. 書名 漢帝国の遺産 道教の勃興	

〔産業財産権〕

〔その他〕

今関コレクションデータベース <a href="https://db3.sido.keio.ac.jp/imazeki_db/">https://db3.sido.keio.ac.jp/imazeki_db/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	堀川 貴司  (Horikawa Takashi)  (20229230)	慶應義塾大学・斯道文庫(三田)・教授   (32612)	
研究分担者	矢島 明希子  (Yajima Akiko)  (20803373)	慶應義塾大学・斯道文庫(三田)・専任講師   (32612)	
研究分担者	陳 捷  (Chen Jie)  (40318580)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授   (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 国際シンポジウム「今関天彭与日本近代漢学研究」	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 International Conference: The Transformation of Sino-Japanese Culture under Modernity; Reconstructing the Imazeki Tenpo (1882-1970) Sinology Collection at the Berkeley Library	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 国際ワークショップ「和刻本漢籍の再定義」	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 2021年度今関旧蔵書研究集会	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	カリフォルニア大学バークレー校	プリンストン大学	ブランダイス大学	他1機関
中国	上海大学	北京大学	浙江工商大学	